

サヴォナローラ：預言・改革そして専制への抵抗

マルコ・ペレグリーニ（石黒盛久訳）

[はじめに]

以下に翻訳・紹介するのは今日のイタリアにおいてルネサンス史研究の最前線に立って活躍する研究者マルコ・ペレグリーニ氏が、甚野尚志教授を代表とする科研費共同研究（中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」——迫害と寛容の二分法を超えて）の研究チームの招きに応え訪日し、山梨大学において2023年9月2日に講演が催された際の講演録である。

マルコ・ペレグリーニ氏は1963年ベルガモ（ロンバルディア州）生まれ、イタリア第一の名門ピサ高等師範学校を終了、ルネサンス期の著名な政治家枢機卿アスカニオ・スフォルツァの研究で博士号を取得。その後ピサ高等師範学校の講師を経て現在は生地ベルガモ大学哲学部の近世史講座教授の職にある。

その博士号取得論文（*Ascanio Maria Sforza (1455-1505). La carriera politica e curiale di un cardinale-principe del Rinascimento italiano*）に窺えるように、ペレグリーニ教授の関心は専らルネサンス期の政治勢力のとして教会国家（*Il papato nel Rinascimento*, Il Mulino, 2015）にあるが、とりわけ氏の研究を世に知らしめたのが、15世紀ローマ教皇の世界戦略の一環として展開されたルネサンス期対トルコ十字軍運動の歴史（*Le crociate dopo le crociate*, Il Mulino, 2013, *La crociata nel Rinascimento. Mutazione di un mito 1400-1600*, Le Lettere, 2014）である。それを通じて近年ペレグリーニ教授は、ルネサンス軍事史への関心をも深めている（*Le guerre d'Italia 1494-1559*, Il Mulino, 2017, *Venezia e la Terraferma*, Il Mulino, 2022）。それと並んでペレグリーニ教授の業績として注目すべきは、コンラート・プールダッハの衣鉢を継ぐ、〈新生〉〈再生〉〈革新〉といった理念を媒介としたルネサンス精神の、異教的・古代的思想を消化吸収したキリスト教的・中世的起源からの読み直しに他ならない（*Religione e Umanesimo nel primo Rinascimento. Da Petrarca a Alerti*, Le Lettere, 2012, *Umanesimo. Il lato incompiuto della modernità*, Morcelliana, 2015）。

こうした観点から見て本来取り上げるべきであったにもかかわらず、プールダッハがコーラ・ディ・リエンツォに注目しながら、サヴォナローラの名に一言も言及していないことに、ペレグリーニ教授は以前より疑念を感じていたようである。そうした氏の疑念を自身で払拭する成果として、コロナ禍の最中に刊行されたのが『サヴォナローラ イタリア戦争期の預言と殉教』（*Savonarola. Profizia e martirio nell'età delle guerre d'Italia*, Salerno, 2020）である。題名からも明らかなおり本書は、教会国家・聖戦・軍事史・ルネサンスとキリスト教といった、上述の如く氏がこれまでの研究キャリアにおいて育んだ諸関心の集大成となっている。20世紀末葉からの歴史人類学や政治文化史学、思想史学の革新の成果をふんだんに取り入れた、新たな権威あるサヴォナローラ伝として、イタリア読書界のからの評価も極めて高く、多くの書評がものされている。

今回はこの政治革命家として自身の権力確立の暴力の行使を不可避としながら、同時に都市フィレンツェとイタリア、更には全世界のキリスト教の刷新を契機とした和解を目指した、マキアヴェッリ言うところの「武器無き預言者」サヴォナローラこそ、「中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」——迫害と寛容の二分法を超えて」を

体現する人物であるととらえ、ベレグリーニ氏にこの近著の概要の紹介講演をお願いした次第である。

1——改革の実現

ルネサンス期において〈革命〉という言葉は、必ずしも政治的意味合いにおいて使用される言葉ではなかった。多くの研究者たちに指摘されてきたようにこの言葉は、天文学にその起源をもっている。それは天体の地球をめぐる公転の一周期の完結を指す言葉であった。こうした天体の回転は、地上に生じる諸事件に影響を与えると信じられていた。その結果この〈革命〉という言葉は、天体の運行が地界にもたらす効果を意味する語彙として、ごく普通に用いられるようになっていった。〈革命〉と称されるこうした効果は、積極的な意味合いを持つものであったが、と同時に戦争や疫病、虐殺や地震のような破滅的な様態を以て出来ることが予期されるものでもあった。

最終期に〈革命〉という言葉は、今日われわれがそれにより含意するような意味合いを持つようになる。即ちそれは、体制の変革を指すべく用いられるようになったのである。16-7世紀のイングランドが、二つの名高い〈革命〉の舞台となったことから、そのことをうかがい知ることができよう。もっとも〈革命〉という言葉のこのような政治的意味合いは、ルネサンス期イタリアにおいてもすでに流布していたものであった。だが〈革命〉という言葉は後世のように、いまだ人口に頻繁に膾炙するようなものとはなっていない。その視点に即して言えばジローラモ・サヴォナローラは、〈革命〉という語のこうした政治的意味合いの創出者の一人と見なすことができるかもしれない。なぜなら彼自身がその中に巻き込まれていった〔政治的〕諸事件に言及するにあたって、〈革命〉というこの創発的な語彙を積極的に用いたからに他ならない。そればかりではない。彼は自身が体験したこうした出来事の摂理的性格を確信し、それらのために己が人類史において重要な役割を果たすことを切望したのであった。我々が見るにサヴォナローラは単なる更新者ではなかった。彼は正に革命的な存在であった。なぜなら彼は——少なくとも彼の見るところによれば——その最終目的の成就を指呼の間に望む〈革命〉を渴望した人物だったからである。

だがそもそもこの人物はいったいどんな人物なのか。そしてまた彼のこうした確信は、いったいどこに由来するものなのであろうか。1452年生まれこのドメニコ会修道士は、その故郷フェラーラを捨て漂泊の境涯のなかその生の転変を闊したが、それはひとつ処に定住することを禁じる、自身の教団の宗規に従ってのことであった。1482年に彼が初めてフィレンツェに足を踏み入れ、あるいは1490年再度その地に舞い戻る以前に、彼の上長は彼を彼方此方の修道院へと転任させ続けた。彼がフィレンツェに居を構えたのは、その生涯の最後の8年間だけに過ぎない。それは1491年に生じた彼のサン・マルコ修道院の院長職への選出と、その結果として配下に置かれた修道士たちを独特の厳格な生活様式のもとに導こうとの彼の努力により特徴づけられる一時期であった。彼が修道士たちに課したこのような生活様式は〈厳修〉と称せられるが、彼はドメニコ会がその創建当初に実践した謹直な生活を回顧させるものだったからだ。

意外なことに正にこのフィレンツェにおいてサヴォナローラは、当代人気の説教師としての成功を勝ち得ることに成功した。フィレンツェ社会内部でのこの目覚ましい台頭を奇貨にサヴォナローラは、政教両面にわたる都市フィレンツェの全般的改革の計画に乗り出した。この改革計画の実行を時の教皇アレクサンデル6世に規制されても、サヴォナローラは教皇への不従順に怯むことはなかった。むしろこのような挙に出ることを通じ彼は、ローマ・カトリック教会の道徳的かつ教導的権威に対し疑念を突きつけた。それは1498年のサヴォナローラの処刑によって終わる異端宣告により、悲劇的結末を迎えることとなるある一つの挑戦に他ならなかった。

中世後期のカトリック的伝統文化の影響を満腔に吸い込んだサヴォナローラは、教皇の権威より預言者たる己の内的靈感を重視することに何の恐れも抱くことはなかった。彼は己が命を危険にさらすことを、己の個人的使命であるとすら言っていた。なぜなら彼は実現すべき聖なる使命を帯びていたからである。彼は自身がそこに追いやられることになる窮境があることを、鋭く自覚していた。実際に彼の立場は矛盾に満ちたものであった。彼がある宗教組織——ドメニコ会——の一員であるからには、なおさらそうであった。なぜそうした組織の主要な目的とは即ち、普遍教会の統一の擁護と公教要理の一体性の維持に他ならなかったから。ドメニコ会修道士たちの公然たる敵は異端者どもであった。この異端者という言葉はこの時代、そのやり方を問わずカトリック教会の位階制の威厳に反抗するあらゆる連中を誹謗するために用いられた言葉であった。哀れなことにサヴォナローラは異端の扇動者と告発されたあげく、その生涯を火刑台の上で閉じることとなってしまった。だが当時において、そしてまた今日においてはもちろん、彼に対するこのような異端宣告の正しさを証明できるものは誰もいない。それはどんな論拠によっても証拠立てることができないのだ。今日われわれが下すことのできる判断によれば、サヴォナローラは異端という虚偽の告発に基づいて、死に追いやられてしまったのだ。

異端者なりとするサヴォナローラに対する告発に如何なる論拠もないことを強調することは、大変重要なことである。なぜなら彼が常に変わらず主張するところによれば、彼がフィレンツェの全面的改革の計画に着手するにあたり、彼は常にドメニコ会修道士としてその義務を果たしたに過ぎないからである。その中で彼はフィレンツェの〈革命〉の動機を抱懷したのであり、正に我々はここでこの問題に分け入っていかなければならないからだ。そもそもフィレンツェの〈革命〉とは、いったい何を意味するものであったのだろうか。一言で言えばそれは、1494年に生じたメディチ家のフィレンツェからの追放のことを指している。それはメディチ家自身が引き起こしてしまった、体制の動揺に端を発する出来事であった。既に我々が検討したようにこのような体制変革を表現するために、当時〈革命〉という言葉は未だ全く一般的なものではなかった。だがサヴォナローラの考えにおいては、メディチ家の失墜と、都市国家フィレンツェにおけるそれに続く新国家体制の出現は、人類史における天来の啓示を担う聖なる〈摂理〉により、あらかじめ定められていたものに他ならなかった。そしてこの案件は、ある一人のドメニコ会修道士の普遍教会とその恐るべき抑圧的機構に対する反抗を含む、あらゆる類の常軌を逸した事態の理解につき、極めて重要なことであった。

ここでまずは1494年秋のフィレンツェの情勢につき概観しておこう。イタリア史上まさにこの時期は、〈イタリア戦争〉と呼ばれる政治的動揺と絡まり合った軍事的葛藤からなる恐るべき時期の始点と目されている。強力な軍勢を率いるフランス王シャルル8世がイタリア領内に侵攻した時から、すべては始まった。この軍勢こそが彼に、正にイタリア半島の南半分にあたるナポリ王国の制圧を、易々と可能ならしめたのであった。その途上フランス王は、その進軍を押しとどめる障害となるものがほとんどないことを見てとってしまった。とりわけ都市フィレンツェは立場を変え、孤立したナポリ王国との同盟を放擲してしまった。時にフィレンツェの指導者は1492年に亡くなったロレンツォ豪華公の嫡子ピエロ・デ・メディチであったが、彼は経験を欠いた若造に過ぎなかったのである。

懸念に苛まれたピエロは、シャルル八世との合意に達するを急ぐあまり、フランス軍がトスカナ領内を自由に進軍することを、早々に受け入れてしまった。加えてフィレンツェはフランス王に対し、冥加金として多額の金銭の支払いを強要される。そればかりではない。フランス王との同盟関係締結の証として都市ピサを含む、トスカナの海岸線上のいくつかの要衝の支配権を、勝手に譲り渡してしまうことさえしてのけた。若きメディチの言動はその多くの同僚市民たちにより、あまりに輕率かつ卑屈なふまいと批判されてしまう。その結果これまでメディチ家の支持者だった者たちをも含むフィレンツェ住民たちの間に、彼に対する不満が激化していった。その結果として生じたのが1494年11月の一斉蜂起であった。ピエロとその弟ジョバンニ・デ・メディチ（後の教皇レオ10世）をふくむ近親者たちの追放が、その結果として生じることとなった。

これこそがサヴォナローラが語ったところの〈革命〉の仔細に他ならない。だがサヴォナローラが使い馴染んだこうした語彙をより詳細に検討しよう。彼が追い求めたのはそもそもいったい如何なる類の〈革命的〉変化なのであろうか。まず最初にサヴォナローラの当代史の理解において、〈革命〉なる語が〈刷新〉なる語と緊密に絡まり合っただけで登場していることに留意しなければなるまい。より詳細に語れば1494年の11月から12月にかけての時期に行われた説教においてサヴォナローラは、近日出来したフィレンツェの〈革命〉に賛辞を呈している。他方1495年の1月から2月にかけての時期に彼は、指呼の間に迫った〈刷新〉に歓呼の声を上げていた。

彼の見解によれば〈革命〉は、それがもし〈刷新〉を以て継続される限りにおいて、神意に適い実り多きものと賞賛され得た。換言すればそれが公共善を擁護する諸要素の〈刷新〉へとつながらない限り、如何なる〈革命〉も政治共同体にとり価値あるものたり得ないのである。1494年11月に生じたメディチ政権の転覆に続く決定的な数週間を通じサヴォナローラは、党派対立に塗れた都市での流血の惨事に対する、自身の深い懸念を表明していた。聖者としての己の名声の全てを駆使し彼はこの頃、その敵対者が鬱積させていた復讐の念からメディチ党の人々を免れさせるべく尽力した。反サヴォナローラ派の人々からの評判が損なわれるのをものともせず、サヴォナローラは〈革命〉が——つまりはメディチ体制の動揺が——内戦の勃発という代価を支払って成就したことを明言している。だが〈刷新〉即ち政治的正義の新時代の端緒は、共同体が平和の裡にその生を営み始めた時に初めて目覚めるのである。そのようなわけで彼は、失墜したメディ

チ体制の支持者の全てに対し授けられるべき恩赦の発令を要請することになる。

言うまでもないことだが、諸党派間の全般的和解をもたらすべくなされた彼の努力——それは彼に賞賛よりむしろ誹謗を招き寄せるような目標であったが——により、彼は誤解を蒙ることになってしまった。彼は優柔不断な人間と、反メディチ派の人々からの信を失うこととなったしまった。だが実際には彼が唱導した敗北した党派に対する寛容の精神は、人類史に関する彼の展望に緊密に依拠する道徳的教説の実現以外の何物でもなかった。彼の展望においてそれぞれの〈革命〉は、市民間の暴力の機会と不可避的になりかねないものであった。だが革命的暴力を最小限に抑えることは、まさに人間の担うべき責務であった。あらゆる〈革命〉の副産物は、人間の道徳的努力により制御されるべきものに他ならなかった。まさにこの事こそが1494年のフィレンツェの革命の立役者たるサヴォナローラが同時に、温和さや赦しの提唱者ともなったゆえんである。

サヴォナローラを仮借ない革命的党派と対立させる分岐点は、自由の観念とその人類史との相關関係であった。メディチ家の敵対者たちにとってみれば1494年11月の事件は、政治的葛藤の帰結——もっと言えば不人気な独裁政治を転覆したクーデター行為の幸運な帰結——であるに過ぎない。サヴォナローラの目から見てまさにこの出来事こそは、人間の歴史に対する神意の現れであった。1494年の〈革命〉が最小限の暴力と破壊を要したとしたら、サヴォナローラの考えるにそうした代価は、少なくとも次の二点によって正当化されるべきものである。第一にメディチ体制の失墜は、権力の許容し難い濫用を除去した。第二にこうした重要な情勢が、フィレンツェ市の社会＝宗教的改革の如きいっそう重大な成就への道を平らかならしめたのである。

フィレンツェの改革こそが1494年の〈革命〉の到達点に他ならなかった。だがこの場合こうした達成は他のより重大な目標、即ち全世界の全面的改革へと展開する可能性を持つものであった。その説教においてサヴォナローラは、フィレンツェを起点とする道徳ならびに宗教的改革の過程の世界規模での宣伝を告知している。彼はフィレンツェから全世界に向けての宣教団の派遣を思い描き、そしてまたそのために自身のサン・マルコ修道院内の高等神学院設置を計画した。更に我々は、偉大な哲学者ピーコ・デッラ・ミランドーラ——彼は古代語や外国語を自在に操るその能力により、当時著名な人物であった——が、この結局は設立されることの無かった高等神学院の語学教師として雇用されることが想定されていたことを付け加えておこう。

サヴォナローラの預言的見解によれば、フィレンツェの改革の全世界への波及は、すべての人間のキリスト教への改宗をもたらすはずであった。より正確に言えば、世界の全面的刷新のゆりかごとしてのフィレンツェあるいはイタリアに始まる、浄化され靈的なものと化した類のキリスト教への改宗を促すはずであった。もちろんこうした預言は、イスラム教徒を筆頭とするキリスト教信仰の狂暴なる敵対者たちのただ中で、かかるキリスト教への全面的改宗がいかにして実現されるのかという問題を引き起こさない訳には行かない。

御神の計画に関するその特権的知識を踏まえサヴォナローラは、ユダヤ教やイスラム教のキリスト教信仰への平和的移行への確信を示している。なぜなら彼によれば一つの「真なる」信仰への人類の統一実現の時は、正に熟しつつあったからに他ならない。この驚くべきメッセージはイ

タリア中をさらには地中海世界全域を駆け巡り、ついにはイスタンブールにさえ達した。そこにおいてこのメッセージは「トルコの」スルタンとその宮廷の耳目を驚かせ、そこで的好奇心と困惑をすら引き起こした。この心をかき乱す預言につき詳細を知ることが望んだスルタンは、イスタンブール所在のフィレンツェ人コミュニティに属する商人たちにサヴォナローラの預言をトルコ語に翻訳することを直命し、それを彼の御前にて読み上げさせたほどであった。

2—刷新を求めて

全世界のキリスト教への改宗をめぐる預言は、サヴォナローラのメッセージの中でもその他に比べあまり着目されることなく、昨今いわば片隅に追いやられた格好になっている側面となっている。だが実はそのことこそは、サヴォナローラがヨーロッパの宗教文化史において占めている役割に関し、ある重要な問題を解明する手掛かりを提供してくれるものとなっている。時に我々はサヴォナローラを中世人と、つまりはルネサンス精神と衝突する〈神政政治〉の理念への不可能となった回帰を志向する時代遅れの人物とする見解に出くわす。だがより真実に近い彼についての見方とはむしろ、彼を15世紀末葉のイタリアに典型的な改革者の一人と見なすそれであろう。こうした改革者としてのサヴォナローラは、我々が「通常一般に有する」ルネサンス観といささか趣を異にするルネサンス観を先駆ける存在となる。サヴォナローラが証し立てようとするルネサンスは、美術的あるいは文学的な事柄ではない。彼が先駆けるルネサンスとは人類を平和と統一へと導く霊的覚醒の謂に他ならない。フィレンツェからそしてまたイタリアから始まるこの刷新の大波は、全世界を覆い尽くすことであろう。まさにこの改革の過程こそが〈真の〉ルネサンスなのである。それは腐敗墮落の時代に終止符を打ち、輝かしき新時代の開幕を告げる歴史の奇跡的一齣に他ならなかった。

サヴォナローラの言行の外見に特徴的な、改革と刷新の等価性に着目することは、大変興味深いことであろう。1494年11月1日になされた、新たなる〈革命的〉時代をめぐる最初の名高い説教（「ハガイ書についての第一の説教」）において説教者（サヴォナローラ）は、熱狂的な群衆たちに対して、御神がその教会とキリスト教共同体の新生を意図しておられることを告知した。この目的は御神により一連の苦難多き出来事を介し成就されることであろう。こう聞いた際に聴衆の心理は正にその時、苦悶と災害と死をまぎ散らしつつあったフランスによるイタリア侵攻に、思い致さざるを得なかったに違いない。このような状況診断を支える構図は、キリスト教の伝統に深く根差すものであった。それは『聖書』になかんとイザヤ書、エレミア書、ダニエル書の如き預言者による諸書に由来するものである。こうした立場のことを我々は、悲観的宿命論神学とでも称し得ようか。それを踏まえて共同体は、己が犯した罪過と不信心の報いとして、苦難と悲嘆と災厄の到来を予期したのである。だがそれにもかかわらずこうした惨害は、歴史的事件の隠れた意味をとらえようとする者にとり、贖罪と救済の得難い機会へと転じ得るものともなった。

11月1日に説教壇上から発せられた陰々滅々とした預言の結論としてサヴォナローラは、押し寄せる大洪水の水に飲み込まれぬよう、フィレンツェの更には全イタリアの人々を悔い改めへ

と差し招いた。聖書に由来する比喩を駆使しサヴォナローラは、フィレンツェの道德ならびに宗教的改革を勧告しつつ、この都を〈ノアの箱舟〉に準えた。換言するならば彼らが御神が懲罰として定め置いた脅威に躓きたくないなら、フィレンツェ人たちは美徳と清貧と祈りの生活に潜心しなければならないと、彼は説いたのであった

数日後サヴォナローラは同一の論題に立ち戻り、現在生じている災厄の究極の目的がカトリック教会の刷新であることを明らかにした。現下のキリスト教徒集団の悲しむべき状況、なかんずく聖職者団の悲しむべき状況に照らし合わせた時、正にそのことこそが早急に必要とされることであった。「ハガイ書についての第八の説教」を通じてサヴォナローラは、ローマ・カトリック教会が度し難いまでに腐敗し、不快なものとなり果てていることを説き明かした。だがそれにもかかわらず、長い歴史の目から判断して教会は、決してなくなってしまうようなものではない。教会は不滅である。なぜならそれはイエズス・キリストおん自らにより打ち建てられ、世の終わりまで存続し続けるものだからである。単にそれは老いさらばえてしまった。だからそれは再び若返ることを必要としているだけなのである。

続く第9の説教でサヴォナローラは刷新の主題を再び取り上げ、フィレンツェに始まりイタリア全土に波及すべき人類の道德的再生についての彼の計画についての説明をさらに推し進めた。イタリア半島のちょうど真ん中に位置するフィレンツェの地理的位置は、御神の計画においてこの都市が、極めて重要な役割を果たすよう予定されている証として称揚された。「汝フィレンツェよ、お前はイタリア全土の改革の初穂となるだろう。まさにこの街から刷新が始まり、またまさにここからそれは随所へと拡散される。なぜならこの都はイタリアの〈へそ〉に他ならないからだ!」。

1494年から1495年にかけての神秘的靈感に満たされた説教を通じ、〈改革〉と〈刷新〉という二つの言葉は互換的なものとして、フィレンツェとカトリック教会の双方に等しく言及するものとして用いられた。ハガイ書に関する一連の説教中の第13の説教においてサヴォナローラは、御神がカトリック教会の更新 (innovazione) を望んでおられること、そしてまたまさにフィレンツェが、その改革を成し遂げることによりこの事業の発火点となるべきことを繰り返した。サヴォナローラの説明によればこの改革は、政治的あるいは社会的 (tempolare) 領域と同じく宗教的 (spirituale) 領域にもかかわるものとされた。もしこの全面的改革がフィレンツェにおいて完遂されたならば、変革の嵐はイタリア全土を吹き抜けることであろう。サヴォナローラの言によれば「全イタリアの改革は、まさにこのフィレンツェから始まる」のだ。

ローマはイタリアの中にある。従って彼や彼の言葉に聞き入る聴衆たちにとり、フィレンツェの全面的改革は西方キリスト教世界全体の改革への道に導くものと解された。これがローマ教皇権を巻き込まざるを得ない案件であったことは、言うまでもない。実に当時のカトリック的良心の泣き所が、そこにあった。それというのもローマ教皇権は多くの事態において、自己改革の計画を真剣に推進する気が全くないことを白日の下にさらしてしまっていたからである。実を言えば多くの批判者たちがローマ・カトリック教会の不道德とか機能不全とかと咎めただてした多く

の点が、当時の教皇たちが15世紀に確立した統治システムの副産物であるに過ぎなかった。その当時教皇権は地域的君主国の一つへと転化し、中部イタリアに多数の都市や領域を獲得することに成功していた。戦争を維持し官僚機構を創設するためには、多額の金銭が継続的に必要とされた。そのため教皇たちは銀行家たちから資金を借り入れることを以て良しとしたのだ。この場合に銀行家たちの方は銀行家たちの方で、最も実入りの良い聖職禄への任命を通じ出費を取り戻すことを図った。同様の理由から教皇たちは君主や地方領主たちとの間に、同盟関係を追い求めることを余儀なくされた。後者もまた彼らの昵懇者たちが、カトリック教会の高位へ取り立てられることにより、そうした同盟関係の報いを享受することを期待したのだ。

キリスト教世界に十分な集権支配を結局は提供することとなる、ルネサンス教皇権の欠陥の諸側面につきここで長舌を振るう余地は我々にはない。ここでは問題は極めて複雑なものであったと言っておくしかない。この問題の更なる解明については、そこにおいてルネサンス教皇権が置かれた、明暗相半ばする状況につき筆者が吟味を加えた、近年刊行した書物 (*Il papato nel Rinascimento*, Il Mulino, 2015) を示唆することを許していただきたい。サヴォナローラのフィレンツェ改革案に立ち戻るなら、こうした試みが単に宗教的 (*sprituale*) 分野のみならず、社会的更には政治的 (*tempolare*) 分野にまで影響を与えることになったのはなぜかと問いを発することができよう。政治的改革者としてのサヴォナローラの横顔が効果を発揮し始めるのはこの点からなのであるが、正にこの点こそが伝統的に、彼と彼の計画についての誤解の源となってきた。たがともあれこの件につき、更なる光を当てることとしよう。

サヴォナローラの偉大な計画に関しさらに十分に理解するために、それが単に聖なる啓示としての『聖書』のみならず、至高の人間知性としてのアリストテレスの哲学からもその着想をくみ上げていたことに留意したい。当時アリストテレスの思想は、まさにそのようなものと目されていたのである。〈改革〉という言葉自体がアリストテレス哲学の産物であったことに目を向けるのは、いささかならざる関心を掻き立てることではなかろうか。なぜならそれが想定するところによれば、万物は質量と形相の合成物であり、その腐敗の過程とは即ち形相の継続的喪失に他ならないと論じているからである。この場合の形相とは始源の純粹なる完全性のことであるが、それは時と弛緩の影響により摩耗することを免れない。賦活の業とはつまりは始発的形相の、原初の輝きの再発見としての〈再〉形成以外の何物でもない。まさにこのことこそがサヴォナローラを祖としルターやカルヴァンがそれに続くルネサンス期のカトリック教会批判者たちが、彼らが希求する〈改革〉を〈原初キリスト教〉への回帰の観点から描き出した所以である。換言すれば彼らは、その〈形相〉を失ってしまったかのように見えるほど〈古いさばえて〉しまったカトリック教会の道徳的かつ精神的蘇生を追い求めたのである。もっと言えば〈改革者〉達とはキリスト教信仰を、その原初の〈形相〉へと立て直すことをその使命と見定めた人々の謂に他ならない。

ここから明らかなように、プロテスタント改革はその名の由来を、アリストテレスの哲学体系の用語に負っている。だがルターやカルヴァンに先立って正にサヴォナローラが、キリスト教信仰をその当初の凝縮性へと引き戻す仕事を買って出た。それどころかサヴォナローラの改革

は、ルターの行動のそれよりも遥かに広い展望を有するものであった。他方それ〔サヴォナローラ改革〕はカルヴァンがジュネーブに、フィレンツェにおいて生じた事態とは異なって成功裏に導入しようとした計画と、なにがしか共通する部分を有していた。既に述べたようにアリストテレスの政治思想はサヴォナローラの心理に対し、その知的教導者として働いた。サヴォナローラがドメニコ修道会員であることを考えれば、この事は別に驚くようなことではない。13世紀以来、自身ドメニコ修道会員であった聖トマス・アクィナスが、アリストテレスの教説の実質的妥当性を容認することにより、ギリシア哲学とキリスト教神学の恒常的提携を成就して以降、アリストテレス思想は人間と自然に関するキリスト教教的見解を合理的に説明する有用な哲学的道具として受容されてきた。

かくしてアリストテレスは後期中世キリスト教世界において、最も高く評価される哲学的権威となった。そしてルネサンス人文主義が出現してからも、彼の優越的立場は実是一向に衰えてはいなかった。それと言うのも15世紀初頭の少なからぬイタリア人文主義者たちが、なにかんづく倫理と政治の領域において、アリストテレスの哲学の賞賛者たり続けていたからである。ドメニコ会内部においてアリストテレスの権威が不動のものであったことは論を俟たない。だが新たな知的雰囲気のもとその興隆を確かなものとすべく、アリストテレス哲学もまた文体的・言語的錬成を蒙る必要があった。奇妙に思えるかもしれないが、ルネサンス期の人文主義者たちはアリストテレスの作品の内容に不満を持ったわけではない。彼らの不満は実は部分的には、残存せるアリストテレス著作の性格に由来するものであった。それらは元々彼の学校の内部から流出したもので、単なる授業の忘備録としての残されたことから、如何なる文飾をも施されていなかったのである。

加えてその著作に文体上の優雅さが欠けていた理由の一つには、中世ヨーロッパにおいてなされたそのラテン語訳の劣悪な質にも求められよう。当時のヨーロッパの知的選良の間に、古代ギリシア語はほとんど知られてはいなかった。それをギリシア語から翻訳できる能力を有する者は極めて稀で、彼らの大半はラテン文芸の最も著名な専門家の班に数えられない者たちばかりであった。従って13世紀にベルギーのドメニコ会修道士メルベークのヴィーレムにより実現したアリストテレス著作のギリシア語からラテン語への翻訳は、その同僚たるトマス・アクィナスの要請に、単に応えることができるといった程度のものでしかなかった。だが時の流れと共にこのヴィーレムの手による翻訳は、粗野極まりないものとみなされるようになり、多くの読者をアリストテレス哲学から遠ざけてしまうことになってしまった。こうした欠点を補うべく、高名なフィレンツェの前衛的人文主義者レオナルド・ブルーニ（1444年没）は、ギリシア語の精通者として、多くのアリストテレス著作の純正ラテン語への翻訳に取り組んだ。こうした作業を通じてヨーロッパの知的選良層に、より滋味あふれる哲学的叡智の素材が提供されることとなったのである。

3—僭主政との闘い

レオナルド・ブルーニの言語的能力によって1438年、アリストテレスの『政治学』の文体的

に洗練された翻訳がヨーロッパに流通するようになり、そこにおいて爆発的な成功をおさめるに至った。新来の人文主義文化によりなされたこの『政治学』の翻訳事業やその他の瞠目すべき成果に対する称賛は、ドメニコ修道会内部においてすら目覚ましいものがあった。14世紀から16世紀にかけての時期、ドメニコ会修道士たちはルネサンス人文主義の斬新さを十分に認識し、その内の幾人かはかかる人文主義の多くの側面を吸収するようになっていた。サヴォナローラ自身がブルーニ訳による『政治学』を読んでいたことは、ほぼ間違いの無いところだろう。そもそも彼はその若年期に、フェラーラのバットISTA・グアリーニの学校で十分な人文主義的教育を施されている。授けられたこうした第一級の教育のおかげで彼は文芸に対する趣味を深め、良き文体と悪しき文体を識別する能力を身に着けるようになっていた。

とはいうものの基本的にはドメニコ修道会は、人文主義というこの新しい文化潮流の内在的靈感に対して、必ずしも好意的な組織とは言えなかった。なぜならこうした新運動は人間の生活における宗教的衝撃を挫きかねないものであり、またその結果として社会の世俗化を促進しかねないものだからに他ならない。ジョバンニ・ドメニチの『夜の微光』(*Lucula notis*)のように、ルネサンス人文主義に対する先駆的かつ先見的な批判もまた、ドメニコ修道会の隊列から現れてきた。この『夜の微光』(*Lucula notis*)という著述は、フィレンツェ共和国の官房長にして、前衛的古典主義の推進者としても知られていたコルッチョ・サルターティ——彼は正にこの仕事を通じて西洋世界の知の歴史の新たな頁をめくる人物となるのだが——との論争のために執筆されたものである。

新たな文化潮流の内在的靈感につき実に厳しい判定を下すにあたりドメニチは、人文主義者たちがカトリック的伝統に対して反抗を開始したのだと主張している。なぜならこうした連中は古代ローマに夢中になり、キリスト教以前の世界に郷愁を感じているからである。だがまさに古代ローマ文明の偉大さに対する彼らのこのような崇拜の下に——と、ドメニチは語を継いでいる——自己賛美と耽美主義の危険が蟠っているのである。人文主義者御得意の異教世界崇拜によって——とさらにドメニチは畳みかける——彼らは、キリスト教信仰の真理をなおざりにし、信仰と慈愛のようなキリスト教的美徳の実践に逆らうようになる。ルネサンス人文主義に対するドメニチの情け容赦ない否認が、その70年後にサヴォナローラが、その間にイタリア世界において優勢となった文化潮流に示した否認の内に反響していることを知るのは、実に興味深いことであろう。

ルネサンス人文主義への反感はサヴォナローラが一連の哲学的前提を、15世紀初頭フィレンツェにおける、先述のレオナルド・ブルーニやコルッチョ・サルターティの如き前衛的人文主義者により明言された政治教説と共有することを、妨げることはなかった。その隊列にサルターティもブルーニも組み込まれることとなる所謂〈市民的人文主義〉とは、まさにこの15世紀初頭に展開された闘争的共和主義の潮流のことに他ならず、またそれは都市フィレンツェの領域国家の首都の範疇への移行の時期に符合するものであった。理念の歴史の中におけるその知的意義にもかかわらず、1434年に生じたメディチ家の政權掌握とそれに続く都市制度の歪曲の結果、フィレンツェの〈市民的人文主義〉はわずか数十年の間に委縮して行ってしまう運命にあった。だが

そうは言ってもこの〈市民的人文主義〉がこの後ヨーロッパ全土に広がる、永続的な知的財産となったことは確かである。そして『政治学』のブルーニによる翻訳もまた、西欧世界におけるアリストテレス政治理論の受容上の新しい章の始まりを告知するものとなった。

1494年末から1495年初頭にかけての時期その学識の深さを介してサヴォナローラは、自身のアリストテレス『政治学』との知的紐帯を明らかにしている。この決定的な時期に彼は、都市フィレンツェの国制改革の計画を推進していた。それは都市中産階級 (*popolo*) の拡大された代表権を基軸に作動する政治システムの再興を意図するものであった。こうした計画の促進のために彼は、フィレンツェ貴族層の指導者幾人かの、野心を挫くべきであると提唱した。寡頭体制の確立を画策したことで悪名高い、俗に〈権門勢家〉 (*grandi*) と称されるこうした連中は概して、ごく少数の反メディチ的心情を持つ家門により領導されていた。さらに重要なことは、メディチ家自体が復権する危険を回避することである。なぜなら彼らは正にフィレンツェ国家の国境地帯の外部に潜伏しつつ、好機到来とみるや直ちにクーデターに乗り出す準備を整えていたからだ。自らの直感を中世的伝統に由来する哲学的定式に当てはめることを切望しつつサヴォナローラは、アリストテレスの政治思想に依拠した。それは正に彼が己の時代のイタリアの危機の文脈に言及することにより、時局に適合させようとした当の知的遺産に他ならなかった。

良く知られているようにこの著作においてアリストテレスは、政治組織の最良の諸形態を概略的に描き出そうとした。その諸形態とは即ち君主政、貴族政そして共和政である。彼はまたこれと並行してこの著作を通じて、最悪の諸形態をも概略的に描き出すことを試みている。それらが即ち僭主政、寡頭制そして民主政である（古代ギリシアの時代から18世紀啓蒙主義の時代に至るまで、西欧的伝統において民主主義は否定的に評価されていたことをここで想起しておこう）。悪しき体制は良き体制の劣化に基づいていると、それを踏まえてアリストテレスは説明している。つまり彼によればいったんそれが墮落するようなことがあれば、比較的良い政治形態が比較的悪しき政治形態に転化していつてしまうのである。その結果としてもしわれわれが君主政を最善の政治組織形態と見なすなら、アリストテレスがそうであったように我々も、君主政の墮落形態としての僭主政こそが最悪の統治に他ならないとみなさざるを得なくなる。僭主政は国家にとっての不幸であると同時に、御神に対する犯行である。なぜなら僭主は悪徳と罪過の主であり、そのことから彼は政治共同体を彼自身もろともに、不道德の深淵へと引きずり込んでしまうからだ。こうした論拠に即し、アリストテレスによる僭主政体制の糾弾は、中世のキリスト教思想家たちによりいっそう強化されることとなった。ドメニコ修道会の知的広告塔として称揚され、またサヴォナローラ自身により最も高く評価された神学的権威でもある聖トマス・アクィナスが、その中の一人であったことは言うまでも無かろう。

15世紀ヨーロッパの教養ある読者たちはアリストテレスの『政治学』から、彼ら自身の時代の政治生活の経験と容易に比較し得る政治的教訓を学ぶことができた。ルネサンス初期のイタリアは都市共同体（コムネ）の集団指導体制から統治の個人的形態への、移行の舞台であった。後者の焦点は〈主君〉（シニョーレ）と称されたある特定の支配者の、政治的優越に据えられて

いた。アリストテレスの読者はこうした過程を、批評的語彙を用いて考察するよう促されたかもしれない。それと言うのも〈シニョリア制〉と名付けられるこの種の支配権は、政権の横領者と目されかねない僭主により領導された、政治組織の劣化形態と容易に同一視し得たからに他ならない。

アリストテレスの『政治学』は、不正に対する反抗や腐敗した政治体の改革に関する手引書としても受容された。国家が市民の道徳的徳性の堅固な土台の上に据えられている時、その良き制度の持続は確固たるものである。支配階層が公共善に献身し利他的精神を以て公事を取り扱う場合にも、同様なことが生じるであろう。まさにこれこそがその不滅の著作（『政治学』）において、アリストテレスにより主張されたことの核心である。だがもし共同体が僭主やその取り巻きどもの手中に落ちてしまったなら、共同体としては一体どうしたらよいのだろうか。

アリストテレスの理論の中においては、我々が言うところの〈革命〉に近い何事かについて如何なる手がかりも見いだされない。アリストテレスは個人的にはどんな類の蜂起や騒乱にも反対であった。そして彼の考察を介して、かかる状況を改善すべき非破壊的なやり方を提供すべく努力した。それゆえ良く助言された政治家はある状況下において、それが達成され得る限り共同体の利益を追求すべきであるが、他方やみくもに完全さを追い求めることも断念すべきであろう。結局のところアリストテレスの理論は、「可能性の術」という政治に関する定義によって把握される。それは革命的变化から、あらゆる利益を排除する概念に他ならなかった。

しかし既に我々が確認したように、サヴォナローラは彼が〈革命〉の語を以て着想したような、神秘的に抱懷された政治計画へと乗り出していた。このことは即ち、かくも崇拜されたアリストテレス理論がサヴォナローラの見解の概念化にあたり、彼の提唱に部分的にしか適合しない模範しか提供しなかったことを示唆している。このことから我々は、サヴォナローラによる僭主政の問題の取り扱い方に、実践面と同様に理論面においても、看過し難いほど顕著な独創性を承認する必要があることが理解される。もちろん僭主政に関するアリストテレスの省察が、彼にとり不可避の出発点であったことは否定し難い。同様に彼は、15世紀バルトロメオ・ダ・サツソフェラートが提示した僭主政についての定義と並んで、聖トマス・アクィナスの政治思想によっても深い靈感を受けていた。それらは己の学識ある聴衆たちに、個人的権力の受容可能な行使とそうでない行使の間の明晰な弁別基準を提供することを意図するものであった。

だが僭主政という正に同一の問題を15世紀後半イタリアの危機的状況の光の下で分析することにおいて、サヴォナローラはアリストテレスも聖トマス・アクィナスもさらにはバルトロメオ・ダ・サツソフェラートをも乗り越えてしまった。彼の洞察力は、僭主の相貌をめぐる印象的な特徴づけへと注がれた。前代未聞なのは並外れて野心的な政治家の特質を描き出すに際しての、サヴォナローラの示した手際である。このような人物は至上の権力の追求とその維持に己を果てしなく追い込んでいくことに全てを賭け、同朋市民たちの尊厳や自由を踏みつぶしていくことにいささかの怯みもない。その結果彼は共同体全体の腐敗墮落を引き起こしていくことになる。しかしここでこうした〔僭主に関する〕考察が立ち現れてきた文脈に、少し目を向けておくこととし

たい。

サヴォナローラはその僭主についての肖像画を、1499年に僭主政という着想を通して彼が手がけた説教において描き出している。それはフィレンツェ共同体がメディチ体制あるいはそれに類した別の者の毒牙に再度かかることを阻止することを目当てとした、〈再〉教育戦略の一環であった。僭主政という毒草は一度に全て根絶されなければならない。この年一年中を通してなされた警告は、1496年2月24日に行われた説教において絶頂を迎えたが、それはちょうどカーニヴァルの見世物に反対する運動——それについてはずっと先に触れることになることであろう——の絶頂と、時を同じくするものであった。

論題の口火を切るためサヴォナローラは、僭主政の二つの類型をめぐるバルトロメオ・ダ・サッソフェラータの弁別を想起している。第一のそれは正当なる職位の欠如に由来するものである。こうした職位の欠如は支配者の地位を無効化してしまう。だがそれは、こうした支配者自身の個人的資質とは何の関係もない。第二の類型とは即ち、支配者の不適切な振る舞いにより生ずる僭主政である。この場合に彼は己が犯した罪過により、自身の支配者としての正当性を喪失してしまう。サヴォナローラが説くところによれば、第二の類型は共同体にとり第一のそれと比べても並外れて有害で、フィレンツェ史において際限なく繰り返される弊害を代表している。彼によれば正にこのような根深い問題に、決着をつける時節が到来したのである。このように考えるとサヴォナローラは、キリスト教的政治思想の伝統中に長く輝かしい生命力を誇る潮流としての、ルネサンス〈法治主義〉の典型的代表者としてその姿を立ち上がられてくることになる。サヴォナローラの見るところ、もし彼らが法制的システムの拘束力により制御されることがなければ、あらゆる権力者が自身に授けられた権威を、たちまち濫用するようになってしまう。

人間の道徳的柔弱さに悲観しつつもキリスト教的〈法制主義〉の徒としてのサヴォナローラは、御神の支えと人間理性の援助のもと正義と自由に適うべく行動する人間の義務に力点を置いた。彼にとり肝要なことはフィレンツェの聴衆たちに対して、僭主政到来の切迫に目を見開くことの重要性を説き明かすことであった。1496年2月24日の説教に際し彼は、自分自身の衝動に身を委ねるがままとなる支配者に襲いかかる権力への依存を、生き生きと描き出している。聖パウロに従いサヴォナローラは、自己愛のうちにあらゆる害悪の源を示唆している。まさにこの自己愛というものこそ、未熟な支配者の飽くこと無き怪物への変身を引き起こす、主要な推進力に他ならない。

公共善に反する彼個人の嗜好の満足を求める僭主は、彼が行使する権力には彼の気ままな意志以外の如何なる根拠もないという考えにとりつかれてしまう。彼は自分を他の誰に対しても——人間に対しても御神に対しても——責任を負わない存在だと思い込み、政治秩序を操るために彼の同朋市民の（恐怖や貪欲や嫉妬といった）最も卑しい衝動を活用する術をあっという間に学んでしまう。あげくの果てに彼は自身の全能に失望しか感じなくなる。だが逆説的なことながら、[まさにこうした態度のために]それが真実に基づくものであらうと空想によるものに過ぎなからうとあらゆる心配事に責め苛まれ、絶え間無い自己防衛に囚われて生を送ることを余儀なくされて

しまう。

サヴォナローラが強調するところに従えば僭主は、彼の家族や彼の党派、彼の取り巻きや彼の食客たちなど、その個人的権勢の拡張のあらゆる手段を強化する。だがそれにもかかわらず彼は、己が孤独の囲いの中に落ち込んでしまっていることを見出す。党派主義により迷路の中に追いやられた結果こうした人物は、世界を己の敵か味方かの二つに分けて見ることしかできなくなる。そして敵を恐れるばかりか、味方に対してすら不信の念を抱くのだ。それと言うのも彼は万人が彼自身が振舞っているような、不誠実なやり方で生きているのではないかと疑うからに他ならない。金銭こそは僭主に執拗に取りつく妄想である。なぜなら彼は、彼から資金をせしめようとする追従者どもに囲まれているからだ。そこで僭主たちは金銭欲によって貪り尽くされてしまう。彼らは自分の気まぐれをあらゆる手段を使って満たそうと、絶望的な試みに急ぎ立てられるからである。サヴォナローラの見立てによればまさにこのことこそが、不安と不幸に対する慰安を求めるこれらの僭主たちにおいて、逆上の感覚主義がしばしば見てとられる理由となる。

20年と経たないうちにマキアヴェッリがその著『君主論』において提示した分類を暗示しつつ——更に我々はマキアヴェッリ当人がこれらの説教の場実際に居合わせてことに思いを致すべきであろう——サヴォナローラは、最悪の僭主とは実に中産階級から台頭し、その権力掌握のために党派対立を利用する類の僭主であると断言した。メディチ家こそまさにこの類の僭主に他ならない。そしてこれらの聴衆の中にかかる当てこすりに気が付かなかった者は、一人もいなかったはずである。それがフィレンツェ人の耳目を引くことを確実に意識に置きつつサヴォナローラは、説教中のあちらこちらにこの都の近年の歴史への言及をまき散らしていた。それは過去60年に及んだ同家の礼讃と対照をなす、メディチ体制についての〈別の〉印象を作り上げる意図を伴うものであった。なかなづくロレンツォ豪華公の知性、メディチ家の台頭は黄金時代の到来として賛美されてきた。だがサヴォナローラの見方からすれば、メディチ家の支配は栄光どころか、不正と道徳的退廃をフィレンツェにもたらしたに過ぎない。

僭主が画策するすべての事柄は問答無用の権威を確立することを目指していると、サヴォナローラは警告する。贈賄という手に出ることも意に介さず彼は、司法当局を買収して己に都合の良い判決を手に入れようとする。あげくの果てに彼は、自身が背後より醸成した市民間の不和の仲裁者として、その姿を現わそうとするのである。彼はまた、都市の最も有力な諸家門間の結婚の媒酌人たらしとする。それはこれらの権門勢家の婚資や遺産を、彼の協賛者たちの利に適うように処分できるようにし、都市の社会生活におけるあらゆる段取りが、彼の個人的権威にかかっているという世論を、喚起しようとしてのことに他ならない。更に彼は、彼がそれを萌芽の内に摘み取り市民間に彼らが統制されているという感覚を拡散するよう、種々の異論を彼に報告する密偵を至る所に配置した。

サヴォナローラが付言するに僭主なる者は、最も威勢ある権門間の抗争から利を引き出す者である。彼は例えば、都市の最も富裕な市民たちに豪華絢爛たる邸宅を相競って築くことをけしかけるが如き、巧妙極まる手を使ってこうした家門間抗争を刺激する。贅沢を専らにすることに

いて、社会的公正や節度が考慮されるようなことは全くない。それどころか貧乏人たちは、彼らのつつましやかな家が金持ちにより召し上げられ、打ち壊されるのを目の当たりにするという屈辱を受け入れなければならなかった。こうした金持ちは、彼らの傲然たる新邸宅建設用地を確保することに飢えていたのである。ここまで見てきたように偏見に歪められたものとはいえ、サヴォナローラのこうした説明が、伝統的にはルネサンス・フィレンツェの誇りと称えられてきたこうした邸宅の建設についての、社会的反響に聊かの光を当てるものであったことは間違いない。

サヴォナローラが説教壇の上で描き出した僭主の現象学を通じ当時の聴衆は、ロレンツォ豪華公とその息ピエロの言動に典型的であった特徴を容易に見てとれたことであろう。ロレンツォは彼により、数十年に及び都市を荒廃させてきた悲劇を己の先祖に負う、冷酷無残な人物として描き出されている。彼の地位はその敵たちがメディチ体制転覆のために画策した陰謀〔パッツィ陰謀事件〕の失敗により確立せしめられた。だがその敵対者の殲滅もその同等者の弱体化も、それにもかかわらず不信尽きない心情の内にある僭主にとり、安心の種とはならなかった。己に友人がいるとの幻想を必要とすることから、彼は自身の周りに一群の追従者どもを侍らせ、また彼らの阿諛に褒美を与えようとした。実にそのようにすることにより僭主は、その一族とその都市の道徳的雰囲気をもますます不実なものへと化してしまう。

宗教的案件に対し敬虔な関心を抱く時ですら僭主は、不実であることを免れないとサヴォナローラは批判する。キリスト教信仰に慰藉を乞い求めながらその一方で彼は、己自身とその家門とそしてまたその取り巻きを利すべく、教会財産に手を付ける心構え十分である。ここでもまた聴衆たちは、メディチ家の宗教保護政策やジョバンニ・デ・メディチ（後の教皇レオ10世）の聖座における昇進に対する、あからさまな示唆を見てとることができただろう。ロレンツォのこの愛息がその幼き時より数多の聖職禄により満たされ、あまつさえ歳僅か一三にして父の良き差配のお蔭を以て、枢機卿の栄位に上り詰めたことを想起しよう。

彼の示唆はまたピエロ・デ・メディチの言動にも及んでいる。ロレンツォの長子にして後継者たるこの人物は、傲慢(*superbia*)という主要な悪徳が、己の同朋市民の上に立つべき機会を決して逃さぬ支配者の心理的振る舞いを辿ることにより、どれほどのものになるかにつき衝撃的な実例を提供した。サヴォナローラは、祝祭行列や公共的遊戯のような些細な点に至るまで、優越の渴望がどれほどあからさまなものとなるかにつき強調して止まない。スポーツ行事に参加する際その身体的エネルギーを誇示することにより、ピエロが多大な快楽を享受していた記憶が聴衆者の心中をよぎることすら、〔サヴォナローラの説教において〕想定されていたのかもしれない。

だが彼の父たるロレンツォもまた、このようなサヴォナローラの非難の対象には含まれていた。なぜならサヴォナローラは僭主が発話や所作において、その対話者を感服させるべく誇示する洗練された振る舞いをすら、空しいものとして告発するからである。聴衆中の誰もが、詩歌や文学、哲学の如き教養の涵養のみならず、著述や演説をめぐる秘教的集団の形成を通じて、ロレンツォがその知的優越を見せびらかしていたことを、思い出すことができたことだろう。こうした姿はフィレンツェの支配階層の記憶に、長く留まり続けたことだろう。数十年後にフランチェスコ・

グイッチャルディーニもまた、発話や記述による伝達に際し彼が用いたやり方における神秘的で深遠な雰囲気や、彼に近侍する者にしか解釈できないような指示を、ロレンツォに独特なものとして伝えている。

サヴォナローラが激しく非難したところによれば、彼が服従させようとする共同体に対し己の影響力を確立するという最終目的無くして、僭主による自身の才華の誇示がなされようはずがない。彼はこうした共同体を崇拜の力と同様に、委縮の力によっても従わせようとするのである。サヴォナローラの言明に従えば僭主政は、最も威圧的な公的犯罪の一つとして畏れられるべきである。それはまた御神に対する犯罪でもある。なぜならその最終効果は、万民が自然法に基づき享受すべき神与の能力としての自由の破壊に他ならないからだ。事実、僭主政に飼い馴らされてしまった共同体の構成員たちは、彼ら自身のことをその主人に依存する他ない者と思いなすことになるに違いない。彼が結論付けるにはまさにこのことこそが、メディチ体制が除去されたのちフィレンツェ人により、奴隷状態に逆戻りする危険を回避すべく、可能なあらゆる対策が取られるべき理由となる。

4——社会的慣習を改変すること

〔メディチ体制転覆の結果〕社会の再教育の計画が大至急必要となった。そして事実そうした計画は、サヴォナローラが僭主政に対抗する運動に乗り出した頃、広く実行に移されたものでもあった。1495年の夏中にかけてサヴォナローラは、ある重要な論考の執筆に着手した。そこにおいて彼は、社会的行動の新たな規範の前提条件を詳述している。それは、フィレンツェ共同体とその道徳的再生の合致を証し立てるものであった。『キリスト教的生活の簡素さ』と題され1496年に刊行されたこの論文は、サヴォナローラの論文中最も成功をおさめたものの一つであり、国際的にも広い反響を博した。それは市民的統一への道筋を模索する共同体に対し、とりわけ合致したキリスト教的価値として、自制心と謹直さを賞賛する。不必要な利便の断念は逆にそれゆえ、その構成員間の平等の絆による真の共和国構築の一里塚として推奨されるべきものとなる。サヴォナローラの主張によれば節度の感覚の涵養によってのみ、他者を打ち負かそうとすることによって浮かび上がる有害な傾向を、市民たちは自制することができるようになる。まさにこうした有害な傾向こそが対抗心を燃え上がらせ、相互的友愛を不可能にしてしまうのである。

それに加えて節度と平等は、フィレンツェ人を一方における傲慢と他方における隷従の相互循環に再度はまり込むことから救い上げる解毒剤となる。この相互循環こそはメディチの権力掌握への過程から知られる通り、僭主政へと容易に導く二つの道徳的悪徳の結合となるのである。サヴォナローラが自制と儉約——これぞまさに〈簡素な〉生活様式である——を、彼が説教壇から僭主政の醜聞を激しく批判すると同時に推奨した、その所以がここにある。彼の観点から見れば禁欲主義は公的美徳の最も健全な基盤であり、専制主義に対する最も効果的な守り手となる。フィレンツェ史に新時代を到来せしめる真に共和的な国家を建設しようとの努力は、政治と宗教の協働関係を必要とする。これこそがフィレンツェを新たなるエルサレムと呼んだ際、聖書との比較

を通じサヴォナローラが表明しようとした、真の目的であった。

フィレンツェ共同体の道徳的再生の過程は、同時に抑圧の側面をも有していた。結論に入る前にまず我々はしばらく、この問題を考察することにしよう。1495 年以来サヴォナローラは、続く数か月の間に効果を発揮すべきものとして、フィレンツェ社会の道徳的かつ政治的再形成の計画に取り組んでいた。この計画は都市政府の支援を受けるものであった。だがサヴォナローラはその支持者と反対者の間に、幕を切って落とされることとなる政治的葛藤に直接巻き込まれることになるうとは、そのとき未だ知る由もなかった。彼はフィレンツェ市政府に参画することを常に拒否し続けていたし、修道士として世俗の用事にかまけることが彼には許されていないと縷言し続けていた。彼が自身に許した唯一の役割と即ち、共同体を宗教的回心へと導くことであり、またそのようにしてキリスト教的理想に基づく立法の実現に都合の良い環境を創出することであった。この目的のために彼は、自身が獲得した御神により未来の事柄を予言する預言の賜物を授けられた、聖なる人であるという名声を利用する覚悟を定めていたのである。

彼が預言者としての霊能を誠実に取り扱っていたのかどうかは、依然として広い論議的となっている。だがここでより重要なことは、サヴォナローラが宗教と政治の間の確固たる区別を維持し続けていたことを、そして托鉢修道士であるというその身分から、自身を政治家とは決してみなしてはいなかったという事実を確認する点にある（当時にあつて聖職者は政治に携わる権能をある程度は付与されていたが、修道士たちは——少なくとも原則としては——そうではなかった）。説教壇から改革的立法を推進していた時ですら、彼は立法作業自体を政治家の手に委ねていた。その結果として彼はまた、フィレンツェの改革の制度的側面の実践を、彼の支持者の間から立ち上がった政治運動に委託していた。この運動の構成員たちは当時その反対者たちから、〈泣き虫党〉(piagnoni)なる侮蔑的あだ名を奉られていた。このあだ名は、サヴォナローラの説教に参じる際の彼らの信心深さを示唆していた。即ち、彼の説教に際して感動がしばしば彼らを嘆息させたり、うめき声をあげさせたり、更には涕泣させたりしたのである。

迫りくる弾圧の徴候が1494 年 12 月 31 日に、フィレンツェの新たな大評議会が機能し始めて間もなく現れ始めてきた。ヴェネツィアのそれに倣ったフィレンツェの大評議会は、メディチ追放後にサヴォナローラが唱道した、国制改革の柱となるべきものであった。その 3500 人の構成員たちを以て（もちろんその全てが同時に列席することが想定された訳ではないが）、それはヨーロッパにおいて最大の政治的代議組織であった。その内部においてよく組織化された〈泣き虫党〉の一派は極めて活動的であったから、この会議をサヴォナローラが説教壇の上から主張した要望に沿った方向に導いていくことは、彼らにとって全く造作もないことであった。その結果として大評議会はその活動を、肛門性愛に対する立法措置の通過を以て開始したのである。それはこの種の事柄に対しフィレンツェにおいてこれまで施された措置として、最も厳しいものであった。

それはカーニヴァルを以てその狙いすました標的とする、徹底的な道徳改革運動の先駆けとなるものであった。前キリスト教的信仰の残存物というその性格を罵倒されつつも、カーニヴァルはサヴォナローラの目から見ても、『福音書』がこうした伝統信仰の残滓に対して、その社会の

征服において如何に後れを取っているかの証となっているかのようであった。それゆえカーニヴァルの抑圧は、公共生活のあらゆる側面に投げかけられた、誤った集合的行動の浄化に向けられた、最も意味深い一歩と想定されていた。カーニヴァルの廃止が少なからぬ教会改革者たちの目標であったことをここで想起するのは、ちょっと興味深いことかも知れない。例えばこうした人々の中に聖カルロ・ボッロメオがいる。彼はトリエント改革の光の下、16世紀のミラノの再形成に努力した人物である。サヴォナローラもボッロメオも「カーニヴァルの廃止という」その目標の達成に失敗してしまった。彼ら以降の如何なるカトリック改革者も、カーニヴァルを抑圧するという彼らの計画をあえて再び取り上げようとはほとんどしなかったことも、結果としてはさほど驚くべきことではなかろう。

キリスト教信仰の歴史においてサヴォナローラとその信者は、カーニヴァルに対する十字軍を組織した最初の者たちではない。キリスト教信仰の厳格な観点に立てば、人間の生活は主として改悛と贖罪から成るべきものである。従ってカーニヴァルは永続化された四旬節に取って代わられるべきものとなる。カーニヴァルのどんちゃん騒ぎの禁止を要求することにおいて〈泣き虫党〉の運動は、初期キリスト教時代にまでさかのぼる社会的禁欲主義の伝統に合致していた。こうした社会的禁欲はフランチェスコ会厳修派の修道士たちにより、ルネサンス初期のヨーロッパに復活していたのである。だがまさにサヴォナローラとその信者たちが、彼らの所期の目的の達成のために採用した新しい道具立てにこそ、絶対的な新しさを見てとることができよう。

カーニヴァルの廃止は、共和国の自由の喪失をもたらしかねない道徳的悪習の根絶と合致すると考えられた。従って「[そのためには] フィレンツェの改革を支援する、あらゆる公的手段の動員も可なりとされる。先々を見越しサヴォナローラは、都市の将来の姿を描き出すことに腐心し、若い世代の協働に期待をかけた。とりわけ彼は12歳から20歳迄の男子青少年をかき集め、彼らに都市の道徳的転換を促進する任務を課した。当時〈修道士の少年隊〉と称されたサヴォナローラ派の若者たちは、共和主義的〈革命〉の切断面となった。カーニヴァルのどんちゃん騒ぎを厳粛な雰囲気へと置換する試みにおいて、彼らは根底的役割を担うはずであった。かかる厳粛さこそは、フィレンツェ共和国という再生せしめられた共同体による価値の新たな基準の採用に、大変有効なものとなったことだろう。

この点においてもサヴォナローラは決して独創的な存在ではない。なぜなら宗教——社会的生活に青少年を巻き込むやり方は、後期中世の教会に知られていなかったわけではないからである。かかる青少年組織の世話を彼は、その昵懇の友人にしてサン・マルコ修道院付きの修道士たるドメニコ・ダ・ペッシアに託した。彼は1498年サヴォナローラと共に、火刑宣告を受けることとなる人物である。一年の準備期間の後、ドメニコ・ダ・ペッシアは1495年に、かねて温めていた計画を実行に移した。若者たちは都市の四つの〈街区〉(quartieri)に照応する四つの〈班〉(compagnie)へと配分された。各〈班〉は、その顧問会により補佐された班長の指揮の下に置かれることとなる。また少年隊の統合の象徴として〈修道士の少年隊〉員は自身を目立たせるために、当時の主流の髪型である長髪に対し短髪を採用した。服飾規範もまた奢侈を控え、〈簡潔さ〉

の理想を推奨するものとなっていた。

〈少年隊〉への加入は少年たちに、みだらな言葉遣いやだらしなさのような古い悪しき習慣を捨て去り、節度ある生活様式を重んじることを要求するものとなっていた。[隊の内部における]違反や怠慢行為は、〈少年隊〉の隊員自身からなる特別法廷において裁かれる。こうした特別法廷は[隊員に対し]規則順守を求め、改悛を課した極端な場合は退会を求める権限を有した。少女たちにはいかなる活動的役割も期待されてはいなかった。彼女たちは当時の慣習通り、家庭内に縛り付けられてあることが求められ、都市の改革の最終的勝利への彼女らの貢献は、その祈禱者であることに限定されていた。

サヴォナローラの少年隊の第一の任務は儀礼的なものであった。もっとも重要な宗教的祭日において挙行される壮麗な行列において、彼らには主要な役割を果たすことが求められた。こうした状況下、祝祭の聖なる性格は若者たちの参加によりいっそう高められることとなる。彼らの年の若さそのものが、贖罪の要素として働くことになるはずであった。その年齢ゆえに純粹無垢なる者と目されることにより、若者たちは都市の救済のための御神との仲介者として機能し、その備える特別な力により災厄をはらうこととなろう。教会内での聖務の遂行中、この若者組はその世話役としての役割を果たすとともに、[来会者たちの]静粛と敬虔なる振る舞いの維持を監督した。[若者組の]こうした役割は教化以外にも敷衍される。というのも彼らには、公的体裁の維持を担うことが期待されたからに他ならない。とりわけ彼らは、瀆聖を禁圧する公法の遂行を担い、その違反者に罰金を科する役を引き受けていた。

[彼らに課せられた]いま一つの役務が、往時の路傍になかんとく交差点に極めて一般的であった、聖所の維持管理であった。そうした聖所の目的は単に信心のためだけではなく、夜間道を照明するためにも有益であった。若者組はこうした聖所の周りにたむろし、通行者に祈禱を求めたり、更には瀆聖に課せられた罰金と同じく、困窮者への義援金に組み込まれることになる喜捨を求めたりした。

サヴォナローラの若者組へのフィレンツェの若者の組織化は幾分かは、その社会における役割を高めるような仕事をそれに課すことを通じて、フィレンツェの下層社会の住民を社会復帰させる必要に迫られてのことであった。男性の若い世代の生活苦は、都市の絶え間ない騒乱の源となっていた。こうした都市においては、少女たちが家庭内に隔離されて成長した一方、少年たちは路上をほつつき歩くがままに放置されていたのだ。こうした場所[路上]で少年たちは群集心理に突き動かされた愚連隊を結成したが、彼らの暇つぶしは無頼の振る舞いと犯罪行為に彩られるが如きものであった。例えば彼らは、傷害行為や脅迫により通行人を苦しめたり、例えば婦女が犠牲者となる場合これを輪姦したりすることによって、彼らの挑発に乗ってきた者に攻撃を加えることを専らにしていた。グループ内での同性愛は普通に行われていたし、競合する愚連隊に対する攻撃性もまた普通一般的なことであったし、それが路上での乱闘に行きつくことは避けられないことだった。カーニヴァルにあたってこうした路上における暴力沙汰が、けが人や時には死者さえ伴う石の投げ合いへとエスカレートすることは、当たり前のことには過ぎなかった。

たとえ彼らが彼らの熱意を、都市の道徳的悪癖の浄化に捧げたとしても、こうした〔少年隊に属する〕若い看守人の言動のうちに、かつての悪習の証拠を見出すことができる。都市の隣近所において彼らの姿が見出されるようになったとたんに、脅威にさらされる集団の間に警報が響き渡ることになる。例えば衣服の贅を誇示することに喜びを見出す金持ちや、宗教的祭日に店を開けることに対する禁令を守らない商店主あるいは賭博人や売春業者、肛門性愛者といった一同は、〔あらかじめ準備した〕避難所に逃げ込む。賭博人や売春業者そして肛門性愛者といった連中は、サヴォナローラの説教壇からの問答無用の攻撃の継続的な目標となっていた。誰であろうと嘲りの犠牲者のうちに算せられたし、嫌がらせは殲滅に至るまで加速された。

これらのことを全て考慮した場合、若者組にフィレンツェの公共道徳の監視役の仕事を委ねたことは、山賊を保安官に任免したにも等しかった。このような印象は、決して根拠のないことではなく、むしろいくつかの更なる証言を伴ったものである。サヴォナローラの〈少年隊〉が成し遂げるべき仕事はある種の〈道徳警察〉のそれに近似していたが、彼らが受けていた委任の非公式の性格に注目することが肝要である。彼らは公共道徳の監視の権限を与えられていたし、それにつき強制力を発揮することも許されていた。だがこうした若者組にフィレンツェ政府は、如何なる公的認知も授けていた訳ではない。それゆえ彼らは公共の役人というよりも、むしろ私的なボランティアからなるものとして登場していた。彼らは武器の携帯を許可されておらず、彼らが行使する強制力は物理的暴力よりむしろ心理的圧力に依存していた。

こうした側面を考えるに、欠陥はサヴォナローラとその助言者たちの側における、〈泣き虫党〉運動の対する指導力の内に見出される。都市の政治的舞台において、フィレンツェの改革与党はかろうじて多数を制しているに過ぎないことを彼らは熟知していた。他方反対派は少数ではあったが、サヴォナローラが推進しようとする国制変革の足を引っ張るため、可能な限りの手段に打って出る覚悟を固めた輩であった。1494年の〈革命〉が支配権力を権門勢家 (grandi) に属する少数の連中の手から取り上げ、それを中産階級 (popolo) に与えたことを忘れてしまうべきではない。メディチ派對反メディチ派寡頭支配層といった内部分裂に引き裂かれていたとはいえ、サヴォナローラの敵対者たちは暴力への方法論的依存からなる残忍な闘争の練達者たちであった。そして正確には、暴力に対する態度こそが、〔サヴォナローラに対する〕反対党派の間の差異を特徴づけるものに他ならなかったのである。

5—暴力の拒絶

サヴォナローラによる明白な指示に従えば、〈泣き虫党〉の運動は暴力の行使を最小限にとどめ、内戦の危機を回避することに努めなければならぬはずであった。だがまさにこの内戦こそが、反サヴォナローラ派がその引き金を引こうとしていたその当のものであった。そのことは共和主義的な若者の運動の効果が、試練にさらされた際に明らかになったことでもあった。カーニヴァルこそは二つの相対立する政治共同体をめぐる概念が、そこにおいて激しく角突き合わせる発火点となる問題に他ならなかった。

最初にこぶしを振り上げたのは〈泣き虫党〉の側であった。1495-1496年の冬に繰り広げられた反カーニヴァル運動に、そのことを見てとることができよう。というのも彼らは各家族がもはやその私有を認められなくなった品々を探し回るため、都市の諸地区を巡回し、各家屋の家探しをすることを指示されたからである。サヴォナローラにより引かれた聖と俗とを分かち境界線の基準に沿って、フィレンツェ人たちは霊的生活を送るのに必要なものだけに満足することを、換言すれば不必要にして世を誤らせると断じられた品々の保有を断念することを求められたのだ。若者たちは異端審問のやり方に即し、彼らのこうした仕事を成し遂げた。多種多様な品物からなる多大な戦利品がかき集められた。それらのうちのいくつかは賭博台や骰子、遊戯札、鬘や衣服、仮面といった悪癖への執着に関わる品々であったが、またいくつかはむしろ芸術や文学の分野に関わる事物即ち書物や絵画であった。だが快楽や娯楽に対しサヴォナローラがぶつけた包括的破門宣告に含まれるものとして、こうした品々もまた遊戯に関わる品々と同様に没収されてしまっている。

このように徴発された物品は、カーニヴァル週間中フィレンツェの中央広場 (Piazza della Signoria) に山として積み上げられることを目的に掻き集められた。ここでカーニヴァル行事の根底にある、前キリスト教時代に遡る人類学的原理を想起しておくことが適切だろう。それは社会的 — 文化的慣習からの〈気違いじみた〉離脱により、人間の実存の重荷からの一時的な解放をもたらすことを狙いとした。サヴォナローラのような原理主義者の目から見れば、このように人間的混沌の爆発は、御神により授与された自然の秩序の罪深い拒絶に端を発するものに他ならない。このような理由からカーニヴァルにおける規範の放擲に、厳格な道德的 — 社会的訓育の精神に基づく反カーニヴァルの賛揚により反撃を加えることが必要とされる。

そこで恒例の〈無礼講〉に代わり 1496 年のカーニヴァルの祭事においては、改悛儀礼の挙行が企画された。それはフィレンツェの再生した共和国つまりは〈新たなるエルサレム〉という状態への移行の証として、企画されたのであった。この〈新たなるエルサレム〉こそは、過去において彼らをしばしば僭主政に屈服せしめた悪徳から贖い浄められた人民の故郷となる。〈泣き虫党〉的味付けを施された壮大なカーニヴァルは、祭事の最終日 (告解の火曜日) にそのクライマックスに達した。その時、巨大な虚栄のかがり火が中央広場 (Piazza Signoria) において点火され、悪魔のイメージによって象られた収公物がそこにくべられた。

翌日となる 1496 年 2 月 16 日 (この日はちょうど灰の水曜日にあたっていた)、聖なる行事はカーニヴァルの無秩序の全き否定と、その不断の四旬節に基づく新たなる秩序による代替を意図とする儀礼により完成された。この朝、若者組はフィレンツェの大聖堂 (サンタ・マリア・デル・フィオーレ寺院) に集結し、彼らのため特別に行われた聖体祭儀と説教を聴聞した。その後彼らは昼食をとるため帰宅したが午後再度、サンティッシマ・アヌンツィアータ広場に集合する。その際に彼らは白い上着をまとい、フィレンツェの各街区に対応する、団旗に先導された四列をなしていた。彼ら若者たちはバグパイプと太鼓の音に合わせて行進し、都市の最も主要な地点のいくつかを巡回したが、このようにして彼らは都市の占取を象徴する儀礼を実行したのであった。都市衛

兵に先導されつつ彼らは、ろうそくとオリーブの枝を奉持しつつ連祷を唱えたり聖歌を歌ったりしたが、そうした聖歌の内のいくつかはサヴォナローラ自身によりって作曲されたものである。

聖歌を誦する白衣の大集団は、その観衆がこれを天使的合唱を伴う天国の姿に比すが如き光景を提供した。数週間後の1496年3月27日——この日はちょうど棕櫚の主日にあたっていたが——彼らは同様の印象を、今度はより強烈な度合いで与えられることになった。この日に行列は、前代未聞の規模において実施されたのである。史料によれば6000名から10000名に及ぶ若者がこの行事に参加した。その内には若者組に合流するよう特別に招かれた少女たちも含まれていたが、そのこともまた観衆たちにそれが常ならぬ規模のものであるという印象をもたらした。サヴォナローラの説教に馳せ参ずる者の数は、この時その頂点に達し、その数は8000名から10000名を数えた。都市の全人口が50000人に及ばないことを考えるなら、この人数は実に衝撃的な数と言えよう。

虚栄の焼却や白衣を纏った天使の如き若者達の行列の如き都市の宗教的革新の公的な誇示は、後世の者の目から見てもサヴォナローラ体制の極印となるもののようには観じられた。だがこうした出来事はその同時代人たちの間に同様の衝撃をもたらすとともに、他方その中の幾人かの者たちがフィレンツェのことを、「大きな修道院に変えられた」街と皮肉たっぷりに呼んで嘲笑するきっかけともなった。もちろんこれらの印象は、サヴォナローラとその徒党により構築された枠組みの脆弱さを考慮すれば、ごくごく表面的なものに過ぎなかった。こうした行事は〈泣き虫党〉により1496年に初めて挙行され、大きな反響を呼んだ。それは1497年に、いっそう壮大な様態を以て繰り返されることとなる。そこにおいて虚栄の焼却の業火は、全て先立つ幾月かの間に収公された物品よりなる、高さ10メートルを超える15層建てのピラミッドを飲み込んだ。逸話によればあるヴェネツィア商人が、この価値ある品々の山に対して、それを炎から救い出し転売してやろうとの思いから、何と20000フローリンという巨額の値をつけて買い取ろうとした。だがこの親切な申し出はフィレンツェ政府により、手厳しくはねのけられてしまったのである。なぜならこの政府は、宗教的熱意を経済的利得より重んじることを誇示することばかりを気にする、〈泣き虫党〉の連中に支配されていたからである。

6——挫折への直面

三回目のそして最後のサヴォナローラ的な反カーニヴァルが挙行されたのは、1498年のことである。その三か月後、国際事情の展開が他の対抗諸勢力との関係において、フィレンツェの立場の弱体化をもたらした。こうした対抗勢力の中でサヴォナローラの主要な敵対者となったのは、教皇アレクサンデル6世に支配されたローマ・カトリック教会であった。〈泣き虫党〉体制の一時的な衰退を利用しつつ、その反対派は攻勢に打って出て、フィレンツェの街路上において内戦状態を現出した。サン・マルコ修道院は攻撃にさらされ、サヴォナローラ当人もまた捕縛されてしまった。市政府宮殿(Palazzo Vecchio)に投獄されたあげくこの修道士は、全部で三回の審問にかけられた。最初の二回は市の法廷によるもので、彼に対して治安紊乱の罪を課した。最後の

一回は教皇の特使の主権になるもので、彼はサヴォナローラに「教会に対する」造反と異端の罪を宣告した。これらの裁判のどれもが、物理的並びに心理的拷問の利用を伴うものであった。先の宣告の公示の後、1498年5月22日にサヴォナローラは公共の広場において、彼の二人の側近の助手と共に絞首ならびに火刑に処された。

これこそ〈泣き虫党〉の政治運動がその精神的首領を失い、その結果としてフィレンツェ共和体制が——それは1512年まで存続したし、1527年から1530年にかけての短いながらも強烈な再興を関することになるのだが——決定的一打を蒙った次第である。だが「サヴォナローラの火刑という」この出来事をより間近に眺めれば、その敵対者からの攻撃に対するサヴォナローラ一党の脆弱性の徴候は、国際的情勢がその存続に不利に転じるに先立ち、その初期の段階からこれを垣間見られる。1497年に生じたある一つの出来事に目を向けよう。1497年とは即ち、都市内におけるそれに対する合意という観点から見て、〈泣き虫党〉体制が正にその頂点を迎えた時期に他ならない。まさにこの事件はその敵対者たちに対し、サヴォナローラ運動がさらした劣勢というものを明らかに証言するものである。「この事件において」決定的な要素とは物理的暴力の行使であった。それはその敵対者たちがその行使を渴望する一方、サヴォナローラとその支持者たちが罪深いものと、頑なに拒絶した解決策であった。

1497年5月25日の〈キリストの聖体〉の祭礼行列において、白衣の若者の一団が都市の街区を荘厳なる行列を成して練り歩いた。橋（サンタ・トリニタ橋）を渡る途上において彼らは、同年配の敵対者の一団に待ち伏せされた。この連中は儀礼を停止させ、参加者を追い散らすに十分なほど強力であったようである。乱闘のさなか、行列の先頭に奉持された十字架が敵対者たちに奪い取られた。そして彼らはこの十字架を川の中に投げ捨てた。それはもちろん不敬極まりない行為であり、その重大性自体、いったん全面対決という事態に立ち至れば〈泣き虫党〉がその敵対者たちの前に、一敗地に塗れる危険に直面していたことを示していた。

説教壇からサヴォナローラは若者たちを慰めたものの、同時に暴力に対し暴力を以て報いることを固く禁じた。この時〈泣き虫党〉は都市の政治的舞台を依然として支配していた。だが1497年の夏になると、疫病の猖獗が多くのフィレンツェの有力家系をして、その一部あるいはその全体を以て都市郊外の地所への疎開を行わしめた。都市が空になっている間、公共生活は麻痺してしまった。そうした時の空白が〈泣き虫党〉の反対派に自身の隊伍を整え、公的暴力のあからさまな行使に基づく反撃の計画を練るゆとりを与えたのだった。

短刀をそして時には剣を手にするこそ、フィレンツェの貴族が打って出た行動であった。彼らの意図は現体制の打倒にあったが、それと言うのも彼らの見方によれば現体制は、小生意気にも頭が高くなった中産階級（popolo）どもに支援された狂信者の一団に操られる独裁体制と目されたからである。〈悪童連〉（Compagnacci）とあだ名された、都市の上流階級の子弟により構成された一団は、新たなるエルサレムとしてのフィレンツェの理念と相反する生活様式を奉じる連中だった。彼らはその好色や泥酔への溺惑を誇示し、彼らが見下す抹香臭い競争相手どもと路上の乱闘に及ぶことを渴望していた。彼らの最高の獲物がサヴォナローラ自身であったことは言

うまでない。実際彼らは——失敗に終わったものの——彼がサン・マルコ修道院から都市の聖堂（サンタ・マリア・デル・フィオーレ寺院）に向かう途上において、彼を襲撃しようと計画しさえしている。

彼らの〈墮落する権利〉を不可侵のものであると呼号しつつ、〈悪童連〉はサヴォナローラが説く永遠の四旬節に戦いを挑み、そのあらゆる含意におけるカーニヴァルの王国の再興を唱道した。そこには改革された共和国の平等主義の柱たる〔生活の〕簡素さへの反撃もまた含まれていた。騒乱はなканずく夜間に引き起こされたが、それはさながら布告されない内戦同様のありさまを呈した。道徳的な躊躇をいささかも感じぬ彼ら〈悪童連〉は、サヴォナローラの徒党に情け容赦なく手を出し、罵詈雑言ばかりか礫をすら投つけるのは無論、短刀や剣を抜くのに加え拳に訴えたり等々、様々の手段を以て彼らを試した。かくして〈悪童連〉はたちまちのうちに、困惑するばかりの敵対者の〈泣き虫党〉に対し、優位に立ってしまった。事態に心を痛めながらも〈悪童連〉による反革命行為に対抗しようとの衝動が、真に復興された共和国に向かう不可欠の過程としての公的暴力の拒絶の推奨を、サヴォナローラに断念せしめることはなかった。

後知恵から見れば、対抗的な青年運動の粉碎を徹底的に推し進めなかったことこそ、このあとすぐに始まるサヴォナローラの興隆挫折の決定要因だったのかもしれない。党派により四分五裂した政治体に統一をもたらす不可避の道具としての暴力を否認しつつ修道士〔サヴォナローラ〕は、フィレンツェの社会生活を制御する能力を失い、15年後にマキアヴェッリがその『君主論』において授けたような〈不適切〉という論評を、蒙ることになってしまった。ここ（『君主論』）においてサヴォナローラは革命の変革に着手しながら、己自身の手段により切迫する内戦に立ち向かうことを通じ、それを底まで極め尽くすことを拒絶する、「武器無き預言者」の元型として描き出されている。マキアヴェッリの目から見て、政治的紛争を取り扱うにあたって暴力から身を引く政治家は、語義矛盾以外の何者でもなかった。

だがこうした論評が歴史的現実と全く合致するものではないことを、ここで強調しておく必要がある。マキアヴェッリによる政治的無能者としてのサヴォナローラに関する含蓄ある批判は、我々の省察を掻き立てるものではあろう。だが我々はその偏向性をも、十分に心得ておく必要がある。マキアヴェッリは『君主論』のこの個所において専ら、危機の瞬間に権威を掌握した後にその指導権の確立に腐心したあげく、それを独裁権力にまで仕上げていく支配者のことを思い描いている。だがサヴォナローラは独裁者になろうなどとは、決して考えてはいなかった。彼は自身のことをフィレンツェに端を発する全キリスト教世界の、普遍的回心の推進者であると信じていた。このことこそ、彼を政治に携わらせた主要なる要因であった。なぜならフィレンツェの国制改革はまさにローマ・カトリック教会をも含む全イタリアの、出発点となる出来事であるからに他ならなかった

〈泣き虫党〉体制の独裁制に対する類似は、ごく表面的なものでしかない。サヴォナローラがフィレンツェ社会を分断した多くの傾向の混沌とした影響を挫くべく、努力を惜しまなかったことは疑いを容れない。彼は自由主義者ではなかったし、多様性においてキリスト教的忍耐により堪忍

すべきに過ぎない不可避の悪をしか見ていなかったことも確かだ。悲観主義に毒されることにより彼は、不統一を人間の悪の現れと目した。だがそれにもかかわらず同時に彼は、歴史の挑戦に対する人間の自発的応答の必要性を確信していた。歴史に対する彼の態度は摂理主義、換言すれば人間の歴史における変化の促進者としての聖なる摂理への信頼への参看を欠いては、理解され得ない。より正確に言えば、摂理の働きへの信頼こそが、温和主義というサヴォナローラの〈欠点〉の強い理由に他ならなかった。極端な手段への依存は、最小限に止められなくてはならない。なぜなら彼の企画の結果は、人間の歴史への神による介入にかかっているからだ。これはもちろんマキアヴェッリによつては、全く共有されなかった確信である。

サヴォナローラの改革計画は、人類に福利をもたらすと考えられる変革を励起するために、どの程度まで暴力や公共の無秩序が許容され得るかという問題をさらけ出す岩礁に、乗り上げてしまった。例外状態（ないしは〈革命〉）において権力を掌握した後、己の権威を確固たるものとする必要性は、彼が自らをそれに属するものと目した聖書の預言者の類型に即して、サヴォナローラにより取り組まれた。政治的問題の解決のため彼が策略や手管を弄したことは極めて稀であるし、力や狡猾さ——これこそマキアヴェッリの言うところの〈力量〉(virtù)である——により頼んだりするようなことは全くなかった。彼は非体系的なやり方を以てフィレンツェの改革から浮かび上がった、ある困難に取り組んでいた。それは部分的には集合的慣習を改変しようと努めることにより、また時には彼が人間の事柄に介入することが期待されていた御神の助けへの呼びかけによる。

このような行動の方向性は預言を靈感の泉としていた。それゆえサヴォナローラは預言者の行き着く先が、『聖書』の預言者たちの大半にとってそうであったように、そしてまたイエズス・キリストご自身にとってそうであったように殉教に極まることを覚悟していた。1495年初頭、サヴォナローラは説教壇から、彼の運命の進退が極まってしまったことを告知している。なぜなら彼はあまりに多くの敵をフィレンツェの中に作り出してしまったことを、良く心得ていたからである。こうした連中は決して消すことのできない怨恨を、彼に対して抱いてしまっている。1496年も押し詰まった頃に彼は、ローマ聖座を含むイタリアの数多の主要権力者たちが彼を抹殺するために温めていた国際的策謀を、熟知するようになっていた。もし彼が1498年まで生き延びられたとしてもそれは偏に、一つにはフィレンツェの国内的状況に、また一つにはヨーロッパの情勢の展開に由来する、偶然的要素の符合のおかげであるに過ぎない。

彼の延命はサヴォナローラに、新たな政治——宗教的秩序の定礎に取り組むことを可能とさせた。だがそれをめぐる困難を克服することは、彼にとって次第に難しいこととなりつつあった。彼の精力の枯渇の徴候は、1498年の晩春には既に窺えるようになっている。そのときに生じた、〈泣き虫党〉体制興隆を確かなものとすべくサヴォナローラが犯した初めての政治的悪手は、恐らくそうした焦燥感によるものであろう。[彼の]疲労感は1498年初頭には、その自己破壊的な頂点に達していた。そのとき修道士[サヴォナローラ]は、自身の失墜を加速するためにありとあらゆることを為しているかのようであった。それはあたかも、御神が人間の歴史に送り給う

破局への彼の共感に照応し、彼がその決定的時節にあたって神助に望みをかけているかのようにさえ見えた。

だが結局いかなる聖なる介入も立ち現れることはなかった。大半のフィレンツェ人が彼らの間にそれが拡散したのに劣らぬ素早さで、サヴォナローラの超自然的賜物への信頼を失うようになった。守り手もなくただ一人取り残されたサヴォナローラは、彼の敵対者たちの手中に容易に捕らえられてしまった。だがここで己への攻撃に対し彼がとった行動につき、ある疑問が提起される。即ち彼の信者たちに無用の苦しみを免れさせるため、彼が自己犠牲を選択し、自身をその敵手に委ねたということは、全く以てありそうなことには違いない。だが我々にとって尚更に興味深いのは、〈泣き虫党〉一同の無行動によってサヴォナローラの捕縛がよりいっそう容易になってしまったことに、目を向けざるを得ないということなのである。彼らの精神的指導者が正に危機に直面していたその瞬間に、彼らはどこにもいなくなってしまうていたのだ。

〈泣き虫党〉一派による反撃の失敗は、彼らが彼らの非暴力というその日頃の道徳的規範ゆえに、この緊急時に際しても容易に武器を執ることが叶わなかったという点に、その原因をある程度求めることはできない訳ではないかもしれない。それはまた一部には、1498年の春における、預言者としてのサヴォナローラの名声の失墜の帰結であるのかもしれない。事実こうした現実を踏まえて、少なからぬ者たちが彼を悪人と嘲り始めたし、残りの者たちもまた沈黙するようになっていた。その不評と政治的不運の時節に自己防衛のための武力による守護を欠いたサヴォナローラは、その汚辱に満ちた死を免れようがなくなっていたし、彼の信者たちはこの事実を指一本動かすことなく受け入れてしまった。サヴォナローラの精神的遺産はフィレンツェの宗教史において長らく影響を残し続けたし、イタリアとヨーロッパの間で意義深い増殖を見るに至った。だが都市とローマ・カトリック教会全体を更新する〈革命〉の夢は、いかなる政治勢力がそれを背後から支えることがないそのことから、突然の中断を蒙ることとなった。改革者としてのサヴォナローラの不適格性についてのマキアヴェッリの評語は、必ずしも全克的外れという訳でも無かったのである。

基礎的参考文献

Marco PELLEGRINI, *Savonarola. Profezia e martirio nell'età delle guerre d'Italia*, Roma, Salerno Editrice, 2020.

Marco PELLEGRINI, *Il papato nel Rinascimento*, Bologna, Il Mulino, 2023.

Cécile TERREAUX-SCOTTO, *L'édifice des sermons savonaroliens*, Genève, Droz, 2023

Lorenzo POLIZZOTTO, "The Elect Nation". *The Savonarolan Movement in Florence, 1494-1545*, Oxford, Clarendon Press, 1994.

Stefano DALL'AGLIO, *Savonarola and Savonarolism*, Toronto, Centre for Reformation and Renaissance Studies, 2010

ペレグリーニ教授の今回の本邦への招聘は 科学研究費補助金「中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」－迫害と寛容の二分法を超えて」（基盤 B: 代表・甚野尚志／課題番号 22H00709）並びに「中近世キリスト教社会の「正しさ」をめぐる隠蔽・曖昧・心裡留保」（基盤 B: 代表 皆川卓／課題番号 23H00683）からの多大な支援のもとに実現したものである。ここに明記し関係各位の謝意を表する。